病気は、出さないことが重要。今後は、予防剤のトップバッターに使います。

埼玉県加須市
株式会社田島農園 代表取締役
田島 祥之さん

【プロフィール】
きゅうり農家3代目。3連棟、4連棟、6連棟のハウスできゅうり57a（品種：常翔、千秀など）を作付。2018年より法人化して株式会社に。

無加温栽培の「常翔」。

湿度をためない環境をつくり、病気発生を低減

今夏まで「ヤング農マンKAZO」という生産者組織の代表を務めた田島さんは、大規模にきゅうりを手がける専業農家の3代目。ご両親、弟さんのほかに新規就農社員が1名、パートさん10名で構成する株式会社田島農園の代表でもあります。田島農園では、環境制御システムの導入や耕種的防除を通じて、病気が発生にしくいハウス内環境を整備。その先進的な取り組みで他産地からの視察も多いのだとか。

「ハウス内の照度・二酸化炭素・気温・湿度をリアルタイムで測定するシステムや、保温しながら湿度を逃がす高機能内張りスクリーンを採用して、湿度をためないようにしています。また、つる下ろし栽培を採用しており、つるを下ろす際は地面に接地する下葉を摘葉して罹病葉は外に廃棄するようにしています」。

こうした取り組みによって、以前とくらべて病気の発生が少なくなりました、と話す田島さん。それでも、予防防除の重要さは変わらないと言います。

うどんこ病、菌核病の同時防除にアフェットを

田島農園では、2月～6月収穫の半促成栽培、3月～6月収穫の無加温栽培、9月～12月収穫の晩抑制栽培、10月～翌2月収穫の越冬栽培といった作型を採用。ほぼ通年できゅうりを出荷していらっしゃいます。

「うどんこ病はいつ出てもおかしくない病気で、春や秋の長雨シーズンは特にあぶない。雨が降った後に乾燥すると菌が一気に広がっちゃう。菌核病と灰色かび病は11月から12月にいちばん発生しやすいですね。病気は出てからだとなかなか抑えられないので、出さないのが前提条件。最大のポイントは予防防除なんです」と田島さんは強調します。

田島農園では昨年、無加温栽培のハウスでうどんこ病が多発した6月上旬に、ローテーションの一剤としてアフェットフロアブルを散布されました。

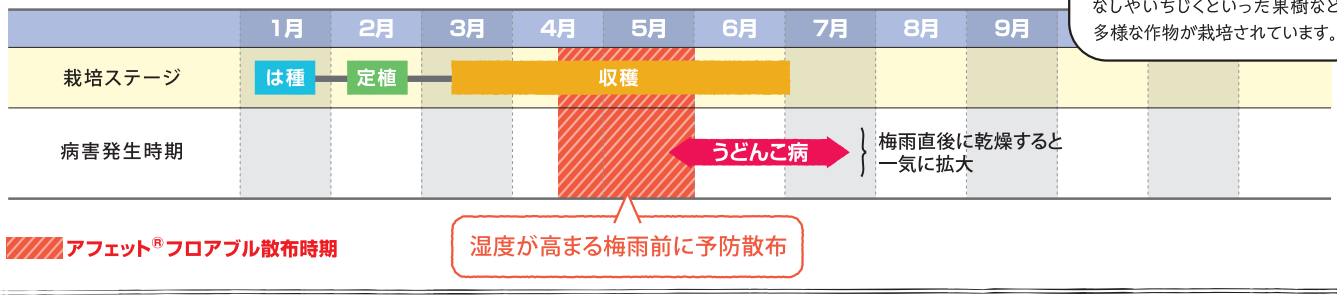
「まわりの仲間も使ってるし、うどんこ病に効果が高い剤ということで初めてアフェットを使ったんです。きゅうりの汚れが少なかったので、すごく助かりました。でも、そのときはすでに多発状態だったので、予防の重要性をあらためて感じました」。

現在の防除作業のメイン担当は弟の充さん。取材時に、アフェットフロアブルの最大の特長である『予防効果の高さ』をお伝えすると、今後の計画をお話くださいました。

防除作業のメイン担当である弟の充さん。

「アフェットって予防効果の高い剤なんですね？　知らなかった（笑）。予防剤ってそんなに多くないので、これからは、うどんこ病が出始める前の4～5月に、予防剤ローテーションのトップバッターとしてアフェットを使います。菌核病も同時防除できますからね。それと、越冬栽培の10～11月ごろにも、菌核病予防としてアフェットをローテーションに入れたい。灰色かび病も同時に抑えられるので、安心感があります」。

将来的には、新規就農の若手社員のレベルアップとともに、作付面積を拡大していきたい、と語る田島さんご兄弟。これからの加須農業からますます目が離せません。

《産地情報》
加須市は利根川に育まれた肥沃な土地を活かし、市の面積の半分を農地が占める田園都市です。県内一の生産量を誇る米のほか、きゅうりやトマト、いちごなどの施設園芸、なしやいちじくといった果樹など、多様な作物が栽培されています。

田島さんのアフェット®フロアブルの使い方
（無加温栽培の場合）